第1章　白岡市の概要

1　社会的環境

(1) 位　置

白岡市は、埼玉県の東部に位置し、東西 9.8ｋｍ、南北 6.0ｋｍ、総面積は 24.92km²ほどの市です。埼玉県東部地域の地理的中心を占め、南東部をさいたま市と春日部市、南西部を蓮田市、北部を久喜市、東部を宮代町と接しています。

市庁舎の位置を基準とした座標は、東経 139 度 40 分 37 秒、北緯 36 度 01 分 08 秒です。

JR 宇都宮線沿線に白岡駅と新白岡駅の 2 駅を擁し、都心まで 40ｋｍ、約 40 分で結ばれています。

道路は、国道 1 路線、県道 8 路線が通過して当市の交通網の骨格を形成しています。

(2) 市域の変遷

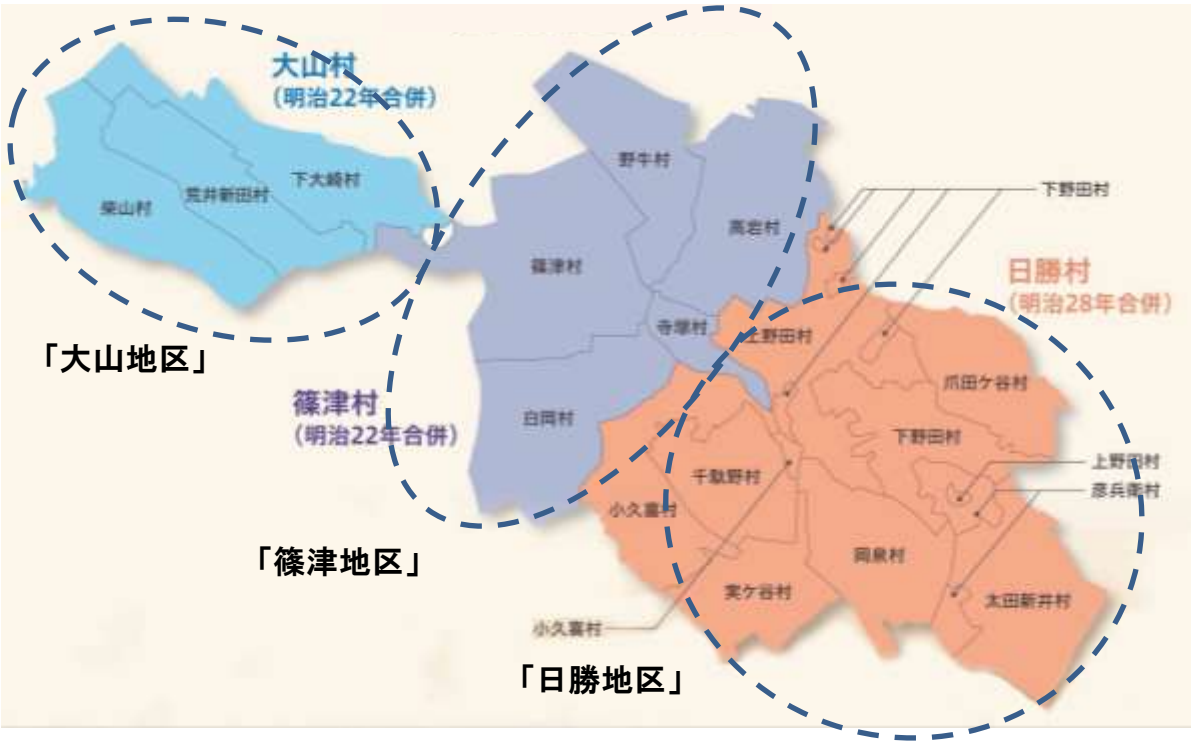
古文書や記録類から、近世期の市域には、17 の村々があったことがわかります。

明治 22 年（1889）に町村制が布かれると、近世村が合併し、篠津村と大山村が置かれました。また、市域の東部の村々は、岡泉村ほか 8 か村組合を結成しいわゆる組合村となりました。その後、明治 28 年（1895）岡泉村ほか 8 か村組合が合併して日勝村となります。

昭和 28 年 9 月、町村合併促進法が公布され、翌 29 年 2 月には、町村合併案が公表されます。4 月には、日勝村、篠津村、大山村の 3 村合併実行委員会が結成され、この年の 9 月、日勝村、篠津村と大山村のうち上大崎地区を除く 3 地区が合併して白岡町が誕生しました。

平成 24 年 10 月には、単独で市制を布き白岡市となりました。

合併変遷図



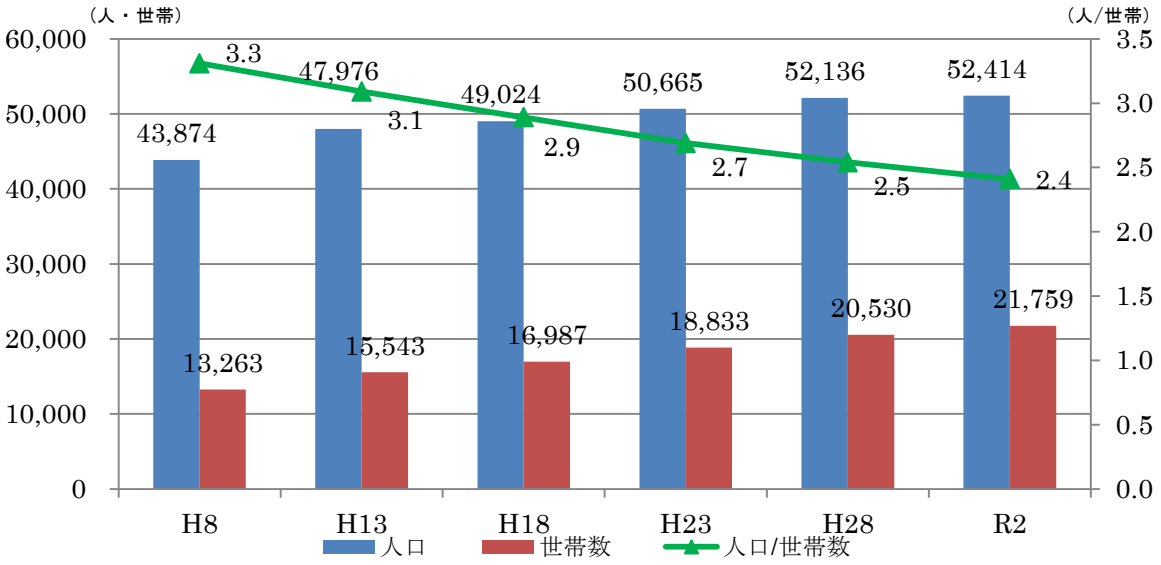
現在でも、昭和の合併以前の村名を冠して、「大山地区」「篠津地区」「日勝地区」などと称します。また、明治の合併の遅かった「日勝地区」は小・中学校の名前をとって「菁莪地区」と呼ばれることもあります。江戸時代の村名を引き継ぐ「大字」単位の区域を呼ぶときにも例えば「荒井新田地区」とか「白岡地区」といった呼称も使われています。

(3) 人　口

当市の人口は、毎年 4 月 1 日現在の住民基本台帳による人口に基づき比較すると、この 10 年は緩やかに増加し、平成 22 年に 5 万人を超えたあともその傾向は続いています。平成 31 年に初めてわずかながら減少に転じましたが、令和 2 年は、人口、世帯数とも再びわずかな伸びを示しています。

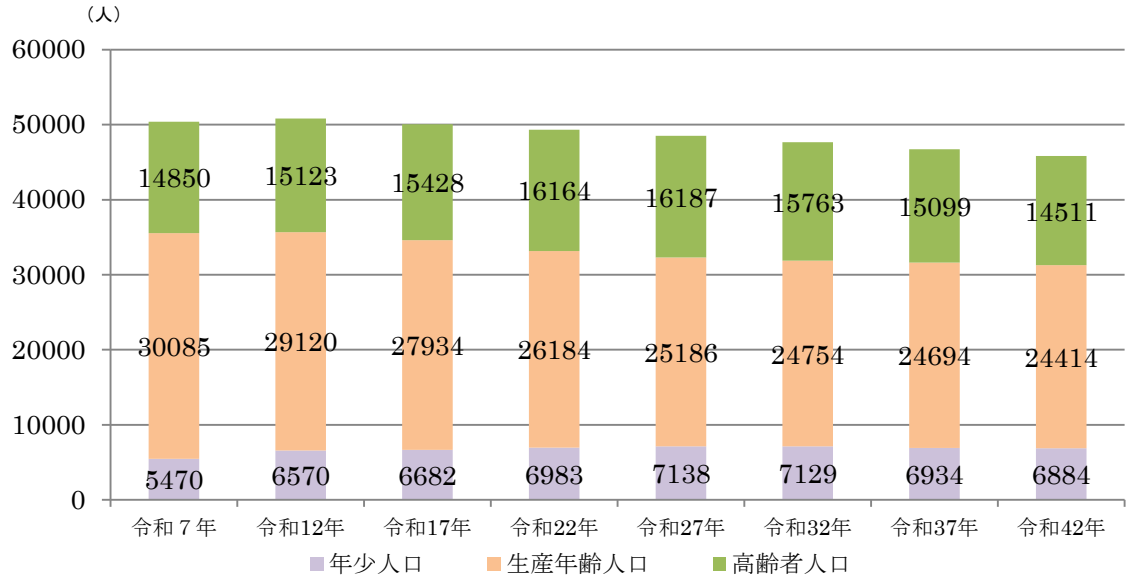
しかし、将来推計を見ると、令和 12 年頃をピークに減少に転じ、令和 42 年の人口は 45,800 人余りと推測されています。

人口・世帯数・１世帯あたりの人口推移



各年４月１日の数値　資料：住民基本台帳

人口の将来推計



資料：国立社会保障・人口問題研究所推計
「第５次白岡市総合振興計画」より

人口構成では、生産年齢人口（15～64 歳）は減少傾向が続く一方、年少人口（0～14 歳）は、平成 26 年に減少に歯止めがかかり、増加に転じ、令和 10 年代以降は 6,500 人から 7,000 人前後で推移すると見込まれます。高齢者人口（65 歳以上）の増加傾向は続いており、年齢 3 区分別の人口割合でも、上昇が見られます。

(4) 交　通

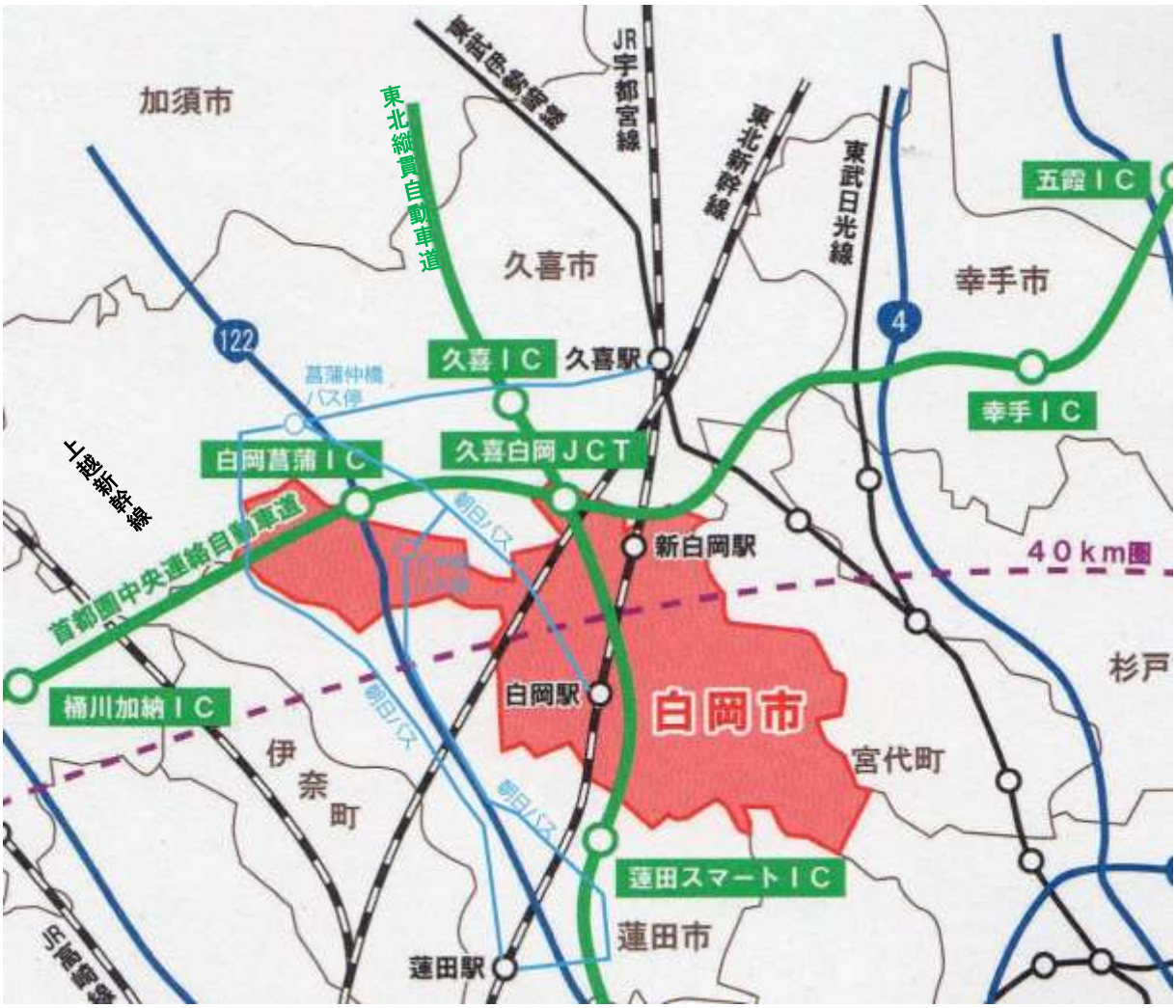
鉄道は、JR宇都宮線が市域のほぼ中央を縦断しており、白岡駅と新白岡駅の２駅があります。市域の中央部へのアクセスは２駅を拠点とすると便利です。

また、高速道路では、南北に東北縦貫自動車道、東西に首都圏中央連絡自動車道が走り、両者が久喜白岡ジャンクションで交わる好条件下にあります。インターチェンジも、東北縦貫自動車道では、久喜インターチェンジと蓮田スマートインターチェンジが、首都圏中央連絡自動車道では、白岡菖蒲インターチェンジが利用できます。

一般道は、市域西部の大山地区を縦貫する国道 122 号と、市域中央を縦貫する県道さいたま栗橋線が南北軸、春日部市と久喜市菖蒲町方面とを結ぶ県道春日部菖蒲線が東西軸となり、近隣からの良好なアクセスが可能です。

バス路線は、隣接する蓮田市の JR 宇都宮線蓮田駅から菖蒲仲橋（しょうぶなかばし）（久喜市菖蒲町）方面行の路線が運行しており、大山地区へのアクセスが可能です。また、白岡駅からは、篠津地区を縦貫して菖蒲仲橋行の路線が運行しています。

白岡市周辺の交通網



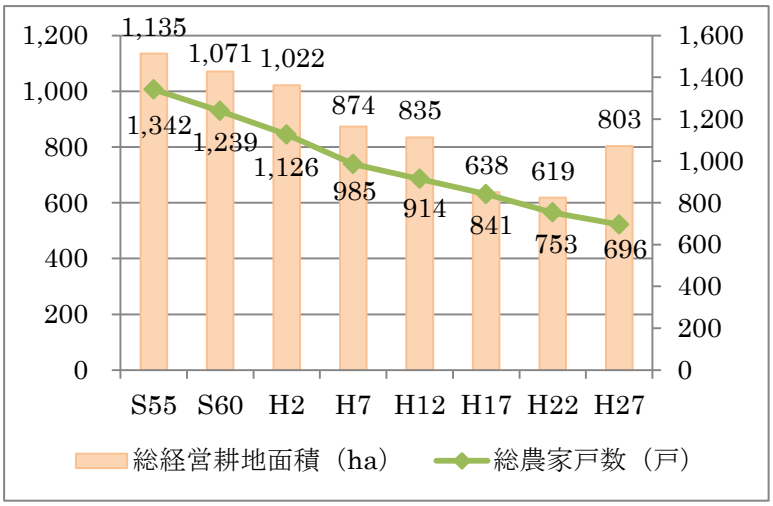
(5)　産　　業

①　農業

農業は、平成 27 年(2015)現在、総農家数は 696 戸で、後継者不足などから減少傾向が続いています。総経営耕地面積は昭和時代後半から逓減傾向にありましたが、平成 27 年度には、803ha となり、やや持ち直す傾向が見られます。

商品作物の主力として、市のイメージ形成に一役買っていた梨の耕作面積も大幅に減少しています。

総経営耕地面積と総農家数の変遷

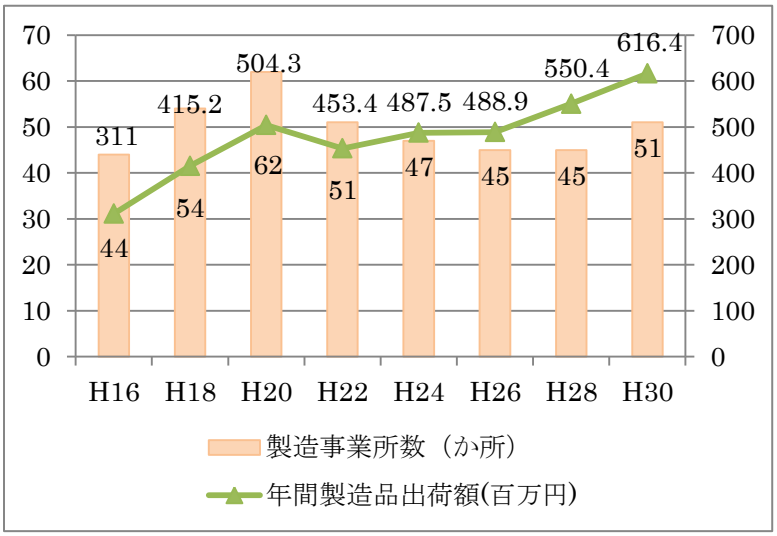


②　工業

工業は、平成 30 年（2018）現在、従事者数 4 人以上の製造業事業所の数は 51 事業所、年間製造品出荷総額約 616 億円です。

近年の推移としては、事業所数と年間製造品出荷総額はほぼ横ばいから増加傾向にあります。

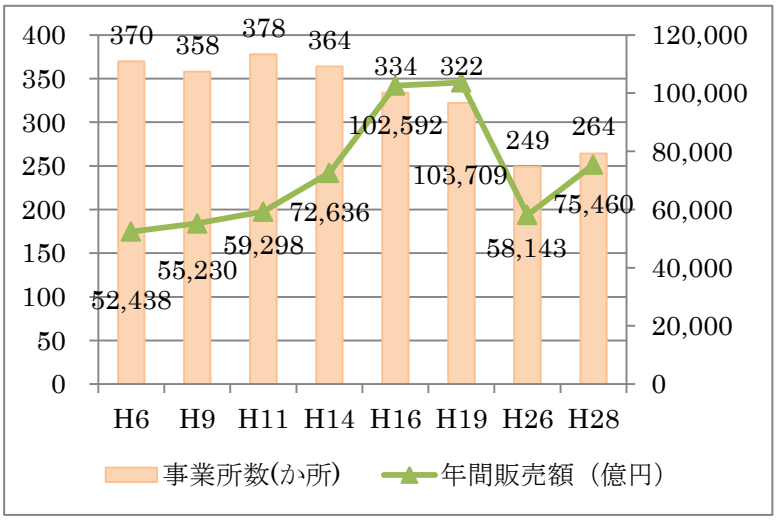
製造事業所数と出荷額の変遷



③　商業

商業は、平成 28 年(2016)現在、小売業と卸売業を合わせて、264 事業所が営業しており、年間販売額は約 754 億円で、やや持ち直しの傾向がうかがわれます。

小売事業所数と販売額の変遷



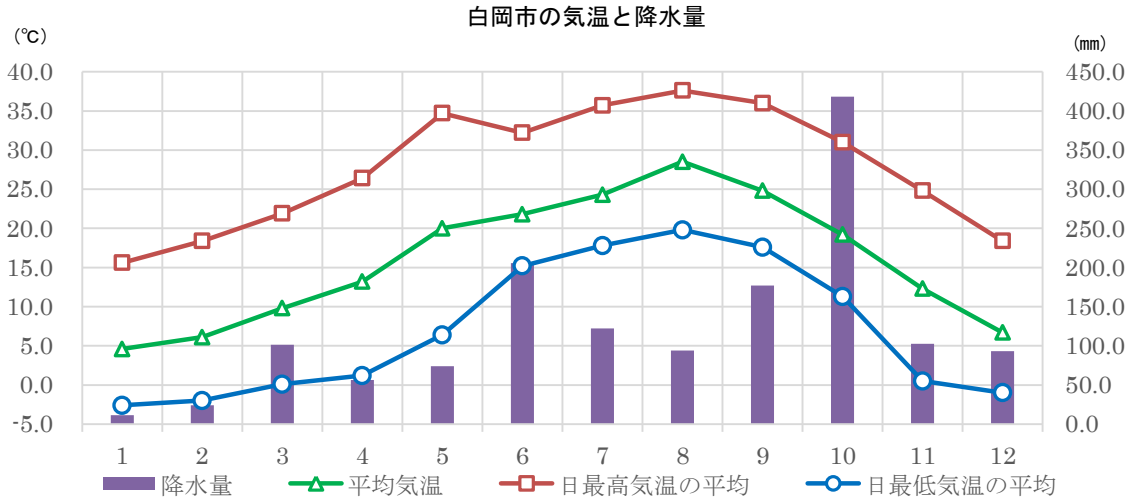
2　自然環境

(1) 気　候

市域の気候は、東日本型の太平洋岸式気候に属し、令和元年の年平均気温は、15.9 度、年間累計降水量は、1,479.5㎜、年平均湿度は 74%ほどです。

夏季の最高気温は 35 度を上回りますが、平均気温が 25 度を上回るのは、8 月だけです。12 月から 3 月までは、平均気温が 10 度を下回ります。

降水量は、梅雨前線や秋雨前線の影響を受ける 6 月と 9 月が多い傾向があります。令和元年は、2 つの台風が関東地方を通過した 10 月の雨量が月積算で 400㎜を上回りました。



データ提供：埼玉東部消防組合白岡消防署

(2) 地　勢

白岡市は、県央部から東部にかけて島状に展開する関東ローム層で形成された台地「大宮台地」の北部に位置しています。地質学の研究成果によれば、大宮台地は地域ごとにいくつかの支台に分けられており、市域には、2 つの支台と 1 つの埋没台地が展開しています。最も東側で、さいたま市岩槻区方面から伸びてくる台地が慈恩寺（じおんじ）支台、市域中央に位置し、蓮田市方面から延伸し、久喜市方面に連なるのが白岡支台、市域西部の大山（おおやま）地区を載せるのが、大山地区埋没台地と呼ばれる台地です。

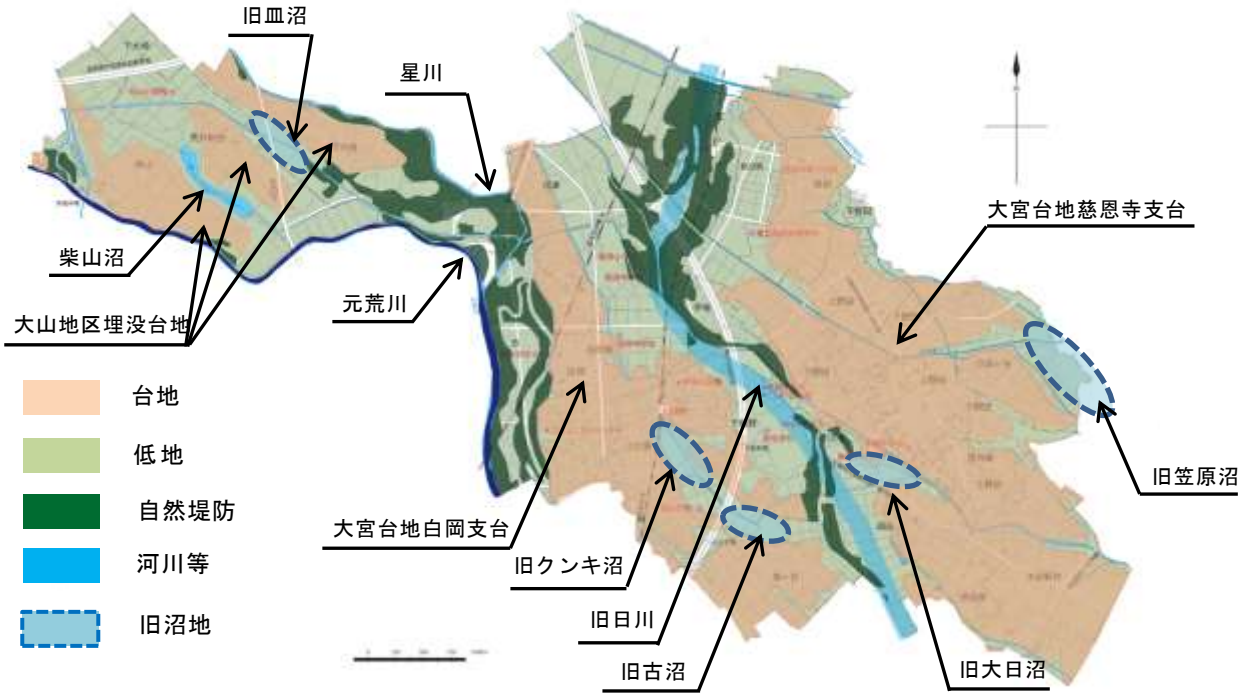
台地の標高は、もっとも高い白岡支台の山地区で約 16.7m、白岡支台北部の久喜市との境界近くの標高は、約 11.2m、大山地区埋没台地のほぼ中央の荒井新田（あらいしんでん）地区では、さらに標高を減じ約 10.3mとなります。これは、久喜市鷲宮（わしみや）付近を中心とするいわゆる関東造盆地運動の影響で地盤が沈降し続けているためで、市域の北西部はこの影響下にあります。河川の流路変遷もこの地殻変動の影響を受けていると考えられます。

市域を流下する主な河川には、元荒川と星川が挙げられますが、かつて、市域のほぼ中央を、日川（にっかわ）と呼ばれる利根川水系の河川が流下していたことも忘れてはなりません。

元荒川は、その名の通り、江戸幕府による荒川西遷事業以前の荒川本流筋の一つとされ、市域の北西部から蓮田市境を流下しています。星川は、新荒川扇状地*の扇端付近を源とする河川で、市域では、久喜市境を東流し白岡支台にぶつかると南へ転じ元荒川に合流します。古くは、白岡支台に沿うように流下していた時代もあるようです。

＊新荒川扇状地：荒川の形成した扇状地で、深谷市畠山付近を扇頂とし、熊谷市久下付近から上之、上中条付近を結ぶラインを扇端とするもの。

白岡市の地勢



日川は、江戸幕府による利根川東遷事業によって近世初期には大きく流量を減じ、やがて廃川となりますが、現在も「日川筋」「日川田んぼ」などの呼称が使われています。

また、県東部地域には、前述の河川を含む多くの河川の乱流によって、幾つもの沼地や後背湿地が形成されました。市域にも、大山地区の柴山沼や皿沼、爪田ケ谷（つめたがや）地区の笠原沼などをはじめいくつもの沼地が形成され、近世以降新田開発されていきます。これらの沼地をめぐって繰り広げられてきた人々の暮らしが、今日の白岡の歴史的特徴の一端を形作っていると言ってもよいでしょう。

(3) 地　質

市域を地質学的に見ると、後期更新世（こうしんせい）*1に形成された最新期地層群に相当します。

慈恩寺支台、白岡支台、大山地区埋没台地の３つのローム台地を含む大宮台地は、古東京湾の海退*2によって形成された海岸平野が、利根川や荒川、渡良瀬川などの浸食によって作り出された台地です。低地部には、河川運搬堆積物が厚く堆積し沖積層が形成されています。

３つに区分されるローム台地は、武蔵野段丘Ⅱ面*3に相当し、上部には立川ローム層の堆積が見られます。下部には東京軽石層（TP）*4を挟んで砂層やシルト質の砂層が堆積しています。また、いわゆる硬砂層（かたすな）*5の残される場所も散見されます。

＊1　12万6000年前から１万1700年前までの期間。上部更新世などとも呼ばれる。
＊2　氷河期には、極地や高山に水分が氷結することで海水準が低下する海退現象が見られる。
＊3　海退によって生じたローム台地を河川が浸食し河岸段丘が形成される。多摩川によって形成された段丘の低位面を立川段丘（立川面）、それよりも一段高い段丘を武蔵野段丘（武蔵野面）と呼ぶ。武蔵野面は成増面、赤羽面、中台面に３区分されており、赤羽面を武蔵野段丘Ⅱ面と呼ぶ。
＊4　約５万年前の箱根火山の噴火によってもたらされた軽石層。所沢付近の武蔵野台地でも5～10㎝の堆積が確認できる。
＊5　約７万年前の河川堆積砂の上位に関東ローム層が堆積し、緻密に硬化したもので、蓮田市黒浜周辺では、約40㎝の層厚があるという。石材の少ない白岡周辺では竈の袖石などに使われている。

慈恩寺支台と白岡支台の間に形成された日川低地や白岡支台の西側を流下する元荒川沿いに形成される低地部では、砂層やシルト質の粘土層などが堆積しています。また、日川低地では、自然堤防が顕著に発達しており、古道や中世寺院などの分布を見ると、遅くとも中世段階にはある程度安定した状況となり、集落が営まれていたものと推測されます。

（4）生態系

① 植生・植物(一覧表:p.132～133)

市域における自然植生は、暖温帯の常緑広葉樹林域に属し、ヤブツバキ、シラカシ、ヒサカキ、シロダモなどが優先します。しかし、市街地はもちろん郊外の農業集落地域でも、自然植生を保つ樹林は皆無に等しく、現在利用されていない樹林でも過去には人の手の入った、いわゆる二次林となっています。特に平地部に残された雑木林は少なく、台地縁辺部の斜面林のほか、屋敷林として樹林が残されている程度です。

歴史的に見ても、近世期の村落でわずかな樹林を薪炭林として維持していたほか、草地を茅場として維持していた記録が見られます。

このような状況の中、平成 22 年に埼玉県の「まちのエコ・オアシス保全推進事業」に伴い保全地となった「彦兵衛下小笠原遺跡ふるさとの森（愛称：ひこべえの森）は、1ha 余りの平地林で、市域に残された貴重な雑木林といえます。

「ひこべえの森」の植生調査では、林内及び周囲の草地と隣接する田を含め、178 種の維管束植物が確認されています。木本では、コナラ、イヌシデ、アカシデ、コブシ、ウワミズザクラ、イヌザクラなどの夏緑広葉樹が優先しますが、かつての植林の名残のスギ、ヒノキが混じるほか、シラカシ、ヒサカキ、シロダモなどの常緑広葉樹の生える混交林となっています。

シュンラン

林床植物では、絶滅危惧種*のカラタチバナやシュンランの群落が見られるほか、隣接する田んぼでは、ミズワラビが見られます。

② 哺乳類

白岡町史資料 7『自然（ふるさとの風土)』（昭和 62 年）によれば、市域に生息が確認される哺乳類としては、ニホンノウサギ、ニホンイタチ、アズマモグラ、アブラコウモリ、ホンドタヌキが挙げられています。過去には、ホンドキツネ（大正 10 年頃まで)、ニホンアナグマ（大正 10 年頃まで)、ホンドテン（昭和初期まで）の記録があります。

また、清左衛門遺跡の土坑内貝塚からニホンジカやイノシシの骨などが検出されており縄文時代には、シカやイノシシが生息していたことがわかるほか、幕末の上野田村の記録では、一橋家の鷹場を管理する上で、畑に出没するシカを追い払うために「短筒」(ピストル)を借り受けていることがわかります。

アズマモグラ

＊絶滅のおそれがある種のことを指し、いくつかのカテゴリーに分類されている。ここでは『埼玉県の希少野生生物植物編 2011』による評価によっており、カテゴリー分類の詳細は資料編に記載した。

市域ではこのほかにげっ歯類として、アカネズミ、ハタネズミ、カヤネズミ、クマネズミが確認されているほか、近年農業被害や建造物侵入の被害が問題となっている外来生物のアライグマ（特定外来生物）やハクビシンが生息しています。

③ 鳥　類(一覧表:p.134)

「ひこべえの森」では、現在までに約 40 種類の鳥類が確認されています。

また、元荒川や柴山沼などの水辺では、カモ類をはじめとする水鳥 20 種類余りが確認されているほか、生涯学習事業として取組んでいる自然観察会やバード・ウォッチング教室などで把握されている種を含めると 76 種類の鳥類が観察されています。

このうち、夏鳥として飛来するコアジサシやチュウサギ、カッコウ、アオバズク、オオヨシキリ、冬鳥として渡ってくるカンムリカイツブリ、コハクチョウ、オオバン、タゲリなどのほか、オオタカ、トラツグミ、コサギ、バン、トビ、ノスリ、チョウゲンボウ、コガラ、アオジなどは、絶滅危惧種*1 に指定されています。

コクマルガラス

オオタカ（幼鳥）

④ 魚　類

白岡町史資料 7『自然（ふるさとの風土）』によれば、市域を流れる元荒川や星川などの河川や柴山沼などの湖沼では、16 種類の魚類が確認されています。

市域には、前述の河川湖沼のほか、主産業であった水田耕作を支えるたくさんの用排水路があります。水田や用排水路に適応したウナギ、コイ、フナ、ナマズ*2 などの魚類やヌカエビなどの甲殻類、マシジミやタニシなどの貝類は、貴重なタンパク源として生活のなかに位置づけられていましたし、漁撈（ぎょろう）活動を半ば生業としている人々や、川魚料理店も営まれてきました。また、農閑期の魚釣りや「カイボリ」と呼ばれる魚とりなどは、レクリエーションと実益を併せ持つものとして広く行われてきました。

一方、近年では、広がりを見せるスポーツフィッシングの影響もあり、柴山沼などでブラックバス（オオクチバス、コクチバス）やブルーギル（いずれも特定外来生物）などの外来魚が増加しており、生態系の撹乱が懸念されています。

＊1 鳥類の絶滅危惧種としての評価は『埼玉県レッドデータブック動物編 2018』による。カテゴリー評価等詳細は、資料編に記載した。

＊2 魚類に関する生物学的調査は行われていないため、白岡町史資料 7 に記載された種名をそのまま引用した。

3 歴史的背景

ー原始概観ー

白岡の台地に人々の暮らしの痕跡が残されるようになるのは、約 20,000 年から 25,000 年ほど前の旧石器時代後期のことです。

人々は、家族など少人数の集団ごとに移動しながら暮らしていたようです。氷河期という環境の下での暮らしは、今の私たちの想像をはるかに超える厳しいものだったに相違ありません。

やがて、氷河期が終わり、気候が温暖化すると、人々の暮らしにも変化が現れます。土器が作られ、弓矢を使った狩りも行われるようになります。

縄文時代の幕開けです。土器を使った煮炊きによって、食料の幅が格段に広がり、衛生面でも大きく改善されたことでしょう。人々の暮らしは、徐々に豊かさが増したと思われます。

市域では、弥生時代の遺跡は見つかっていません。なぜでしょうか？おそらく、水田で米を作るようになった人々の生活の場は、台地から低地に移ったため、弥生時代の集落は見つかりにくいのだと考えられます。

古墳時代の集落は、再び、台地上に戻ってきます。水田作りの技術が向上し、耕作規模の拡大につれて、水田域と居住域とが別れたためと考えられます。しかし、土を高く盛り上げた墓である「古墳」は、市域では見つかっていません。

タタラ山遺跡出土石製装飾品群（市指定）

・岩宿遺跡(群馬県みどり市)が形成される

・タタラ山遺跡・入耕地遺跡・清左衛門遺跡などで旧石器が出土

・橋立岩陰遺跡(秩父市)が営まれる

・清左衛門遺跡から有舌尖頭器が出土

10,000 年前

・本田下遺跡で集落が営まれる

・タタラ山遺跡で集落が営まれ始める

6,000 年前

・タタラ山遺跡集落最盛期

・縄文海進最盛期

・正福院貝塚が作られる

・茶屋遺跡の集落が営まれる

・三内丸山遺跡(青森市)作られ始める

・山遺跡・皿沼遺跡などで集落が営まれる

4,000 年前

・清左衛門遺跡・入耕地遺跡で集落が営まれ始める

3,000 年前

・前田遺跡で集落が営まれる

ミミズク型土偶（前田遺跡）

2,300 年前

・登呂遺跡(静岡市)で集落が営まれる

1,700 年前

・入耕地遺跡・皿沼遺跡・茶屋遺跡などで集落が営まれる

・埼玉古墳群(行田市)作られる

・神山遺跡・中妻遺跡で集落が営まれる

1,300 年前

＊赤字は市内の出来事

（1） 旧石器･縄文時代

① 旧石器時代

日本列島に、人々が暮らし始めるのは、10 万年から 12 万年前のことと言われています。この時期地球は氷河期で、水分は極地や高山に凍りつき、海水準は現在より 150 から 200m近くも低かったと考えられています。

市域で現在確認できる最も古い人々の暮らしの痕跡は、今から 20,000 年から 25,000 年ほど前の旧石器時代後半のものです。

人々は、ナイフ形石器という先端の尖った組み合わせ式の槍を携（たずさ）え、大型の獣（けもの）を狙った狩をして暮らしていたと考えられています。彼らの残した様々な石の道具は、関東ローム層と言われる赤土の中から発見されます。市域では、白岡支台上のタタラ山遺跡や入耕地（いりごうち）遺跡、山遺跡、中妻（なかづま）遺跡など、慈恩寺支台上の清左衛門（せいざえもん）遺跡や上小笠原（かみおがさわら）遺跡などから見つかっています。

ナイフ形石器出土状況（上小笠原遺跡）

② 縄文時代

氷河期が終わりを告げ、気候は徐々に温暖になり始めます。15,000 年ほど前になると、人々は、土の器を作ることを覚え、弓矢で狩りをするようになりました。隣の宮代町では、人々が土器作りを始めた縄文時代草創期（そうそうき）に作られた「微隆起線文（びりゅうきせんもん）土器」が見つかっています。市域で最も古い土器は、これより少しのちの縄文時代早期初頭の「撚糸文（よりいともん）系土器群」と呼ばれる一群で、タタラ山遺跡や中妻遺跡などで見つかっています。

約 6,000 年前、縄文時代前期になると気候は一層温暖化し、極地や高山の氷河が解け海水準が上昇します。川に沿って海水が内陸部に入り込み内湾が形成されます。縄文海進（かいしん）と呼ばれる現象です。この頃白岡を含む大宮台地周辺では、たくさんの貝塚が作られるようになり、土器に精緻な縄目模様を施した文化が花開きます。この頃作られた土器群をその縄目模様から「羽状縄文（うじょうじょうもん）系土器群」と呼びます。隣の春日部市の花積（はなづみ）貝塚から出土した土器を標識とする「花積下層式土器」、蓮田市の関山貝塚出土土器を標識とした「関山式土器」同じく黒浜貝塚群から出土した土器を標識とする「黒浜式土器」などがこれに当たります。

タタラ山遺跡*は、花積下層式土器が使われていた時代の大きな集落の跡で、これまでに約 70 軒にのぼる住居跡が見つかっています。この集落は、現在の元荒川の形成した谷筋を見下ろす高台に築かれた集落で、この谷筋を行き交う人々と多くの交流を持っていたことがうかがわれます。交易でもたらされた貴重な石材を用いたイヤリングやペンダントなどの石製装飾品の数は、これまでの発掘調査で既に 60 点近く出土しており、特に鳥や動物をかたどったと思われるペンダントは貴重なものです。また、東海地方や北東北からもたらされた土器や石器もたくさん見つかっています。

＊タタラ山遺跡は、旧石器時代から断続的に使われている遺跡で、縄文時代前期初頭（約 6,000 年前）に最盛期を迎える。その後も、縄文時代を通じて使われたほか、古墳時代、奈良・平安時代にも集落が形成されている。このように多時期にわたり人々の生活の痕跡が残される遺跡は珍しくないが、タタラ山遺跡や入耕地遺跡、清左衛門遺跡などはその代表的事例である。

縄文時代中期には、人々の暮らした集落の数はピークを迎えます。山遺跡や下大崎地区の皿沼遺跡、上野田地区の赤砂利（あかっちゃり）遺跡などで規模の大きな集落遺跡が形成されます。しかし、市域に形成された縄文時代中期の集落はいずれも中期後半のもので、縄文時代中期前半の集落は見つかっていません。

縄文時代後期になると集落の数は減少する傾向が見られますが、中期から継続して営まれる集落が多く見られることから、単純に減少するというより、より住みやすい場所に集約される傾向があると言ったほうが適切かもしれません。こうした集落は、こののちの晩期半ばまで継続的に営まれる傾向が見られます。清左衛門遺跡や実ケ谷（さながや）の前田遺跡などが好例です。これらの遺跡に共通することとして、大きな谷筋から派生する支谷に面した豊富な湧水を利用できる緩斜面に立地することが挙げられます。

清左衛門遺跡では、木組みの水場遺構が検出されトチの実やクリ、クルミなどの堅果類が出土しているほか、土坑内の貝層からニホンジカやイノシシなどの動物の骨が多数出土しました。こうした資料の分析から縄文時代の人々の食生活を始め、周辺の自然環境などもある程度復元することが可能です。

清左衛門遺跡や前田遺跡では、縄文時代晩期の墓坑群が検出されており、集落域と墓域との関係なども把握できれば、縄文時代の人々の暮らしぶりがより鮮明になることでしょう。

水場遺構（清左衛門遺跡）

土坑内貝塚（清左衛門遺跡）

柄鏡形住居跡（清左衛門遺跡）

(2) 弥生・古墳時代

① 弥生時代

多くの遺跡があり情報量の豊かな縄文時代と比較して、弥生時代は、白岡の歴史の糸が最も細くなる時代ということができます。市域では、弥生時代の遺跡は現在のところ見つかっていません。

これにはいくつかの理由が考えられます。まず、1 万数千年に及ぶ縄文時代に比べ、関東地方の弥生時代は、わずか 3～400 年間と考えられ、その時間幅が全く異なることが挙げられます。

市域に残された縄文時代の遺跡は、明らかなものだけで 30 数遺跡ありますが、裏返してみると、1 万数千年間でわずか 30 数遺跡とみることもできます。

次の理由として、水田耕作を始めた弥生時代の集落は、水田に近い低地域に形成されていた可能性を挙げることができます。縄文時代の集落の多くが台地上に形成されていたのに対し、現在でも水害に見舞われることのある低地域に集落が形成されていたとすれば、水害で押し流されてしまったり、厚い沖積土の下に没してしまったりして、見つけられないなどの可能性が高いものと思われます。

② 古墳時代

市域には、高塚を築いた墳墓いわゆる古墳は知られていません。弥生時代から引き続き歴史の糸が細い時代です。

しかし、弥生時代と違って、古墳時代の集落遺跡はいくつか残されています。白岡地区の茶屋遺跡、タタラ山遺跡、入耕地遺跡、下大崎地区の皿沼遺跡、篠津地区の神山遺跡、中妻遺跡などです。

茶屋遺跡、タタラ山遺跡、入耕地遺跡、皿沼遺跡などでは、古墳時代前期の五領式土器を伴う集落が検出されていることから、当然、その前の弥生時代から人々の暮らしが継続して営まれていたと考えることが自然でしょう。また、正福院の境内からは、この時代のお墓の一形態である、方形周溝墓というお墓が見つかっています。この形態のお墓も弥生時代からの流れを汲むものです。

古墳時代前期の住居跡（入耕地遺跡）

近隣の古墳には、久喜市菖蒲町の栢間天王山塚古墳を盟主とする栢間古墳群、蓮田市の椿山古墳群、春日部市の内牧古墳群など、古墳時代中期から後期の古墳群が見られます。市域でも、今後どこかで古墳跡が見つかる可能性があるものと思われます。

古墳時代後期の住居跡（中妻遺跡）

―古代・中世概観―

古代の白岡は、武蔵国埼玉郡大田郷に属し、その推定範囲は白岡のほか、現在の久喜市、宮代町、さいたま市岩槻区周辺であったと考えられています。

白岡では、古代の集落跡のほか、鉄作りや炭作りなどの生産遺跡の存在が確認されています。

平安時代末期、関東地方では平氏、源氏などの軍事貴族や国司、郡司の子孫などが有力な土豪と結び付いて土着し、その土地を開発していきます。

彼らはその土地の名を名乗り、普段は荘園の経営や地方の役人、都の有力貴族などとの交渉、あるいは荘園を巡る紛争の解決などにあたっていますが、いざ争いが起きると血縁や同じ地域で気脈を通じる領主たち同士で団結し、武器をとって戦いました。

武蔵国では、武蔵七党などと呼ばれる有力な武士団が知られています。

白岡周辺は、桓武平氏の流れを汲む野与党の勢力基盤となっていました。当時、白岡、小久喜、実ケ谷近辺は鬼窪郷といわれ、野与党の有力な一族である鬼窪氏の拠点であったことが分かっています。

鬼窪氏は、鎌倉時代から室町時代にかけて、その武勇を知られ、重要な位置を占めた氏族であることが、文献史料などからうかがわれます。

木造薬師如来坐像（安楽寺・市指定）

飛鳥

645　乙巳の変

・沖山西遺跡の炭窯操業開始

奈良

701　大宝律令制定
710　平城京遷都
・南鬼窪氏館跡の炭窯操業開始

平安

794　平安京遷都

・大山遺跡（伊奈町）の製鉄炉操業開始
・中妻遺跡の鍛冶工房操業開始

913　延喜式編纂
939～940　平将門の乱

金銅仏（神山遺跡）

1054　渋江兼重、忠恩寺を開基
1056　源義家が白岡八幡宮に奥州征伐の戦勝を祈願する
1185　鬼窪行親、源頼朝の命で鎮西の源範頼への使者となる

鎌倉

1185　鎌倉幕府の成立

1258　鬼窪又太郎、宗尊親王の後陣随兵となる
1274・1281　元寇

室町

1333　脇屋義助、北条氏討伐に際し大徳寺にて戦勝祈願
1333　建武の新政
1338　室町幕府の成立
1349～1352　観応の擾乱
1351　鬼窪弾正左衛門、鬼窪左近将監、高麗経澄とともに鬼窪（白岡）で挙兵

1370　鬼窪修理亮、義堂周信に出家を申し出る
1456　鬼窪八幡宮鰐口奉納
1467　応仁の乱
1468　聖天院鰐口奉納
安楽寺薬師如来体内にこの年の修理銘あり
1502　興善寺、季雲永岳により曹洞宗に改宗

安土桃山

1553　岩付城主太田資正、忠恩寺門前百姓に棟別役を免除
1571　鬼窪尾張繁政、寿楽院を開基

(1) 奈良・平安時代

市域に残された奈良・平安時代の遺跡としては、タタラ山遺跡、中妻遺跡、実ケ谷の鶴巻遺跡、などが挙げられます。特にタタラ山遺跡と中妻遺跡は、鉄生産に関わる生産遺跡として注目されます。タタラ山遺跡は、いわゆる大鍛冶こそ見つかっていませんが、大口径の羽口や溶けた炉壁ブロックなどが出土しており、近辺に鍛冶炉の存在を感じることのできる遺跡です。隣接する山遺跡や、近辺の鬼窪尾張繁政（南鬼窪氏）館跡、沖山西遺跡では、8 世紀に遡る炭焼窯が検出されており、多量の燃料炭の供給を裏付けています。

中妻遺跡では、精錬炉を持つ工房跡や集落跡が検出されており、鉄生産に関わる集団が存在したことを物語っています。

この中妻遺跡は、荒川と星川の合流点に当たること、白岡支台を挟んで荒川と日川（利根川）が最も接近する位置にあることなど、交通や流通の要衝であったものと考えられ、中世以降の白岡を考える上でも、大変重要な遺跡と言えます。

精錬炉を持つ工房跡（中妻遺跡）

(2) 鎌倉時代

武士の活躍する中世、白岡の地にも有力な武士団が登場します。武蔵七党の野与党鬼窪氏です。野与党は、桓武平氏の流れを汲み、上総介や下総介などとして勢力を張った千葉氏と同族に当たります。「千葉大系図」（『房総叢書』）によると坂東平氏の祖と言われる平良文の孫の平忠常の弟胤宗を野与党祖としています（諸説があります）。

鬼窪氏は、この野与党の中の有力な一族で、胤宗の孫野与基永の子行基の第 2 子定綱が鬼窪六郎を名乗ったことが知られているほか、基永の第 3 子経長の孫行親が南鬼窪を名乗っており、2 流の存在が知られています。

入耕地館跡航空写真（入耕地遺跡）

南鬼窪小四郎行親は、『吾妻鏡』元暦 2 年（1185）3 月 14 日の条に、源頼朝の命により、鎮西の源範頼への御書を遣わす使者となっていることがわかります。

元暦 2 年 3 月 14 日は、平家が壇ノ浦で滅亡する 10 日前に当たります。小四郎行親が届けた御書には、平家追討のことや宝物の取扱いのことが記されていたとされ、行親が鎌倉方の中で重要な位置にあり、頼朝の信任が厚かったことをうかがわせる記録と言えます。

一方、鬼窪六郎定綱の系譜は、「弘綱－左衛門尉弘家－太郎光□－又太郎某」と家系を継承します。又太郎某は、『吾妻鏡』正嘉 2 年（1258）3 月 1 日の条に、将軍宗尊親王（鎌倉幕府 6 代将軍、皇族初の征夷大将軍）の二所権現*御発進に際し、後陣随兵として従っていることがわかります。

＊　二所権現：伊豆山権現（伊豆山神社）と箱根権現（箱根神社）。

鬼窪氏の本貫地白岡では、建久６年（1195）鬼窪某が、頼朝の命を受け白岡八幡宮の社殿を造営し、社領 100 貫文を寄進しています。この時、別当寺の正福院は真言宗に改宗したと伝えられます。

このほか、平安末期から鎌倉初期にかけて開かれたとする寺社に、高岩の忠恩寺（天喜２年・1054）、篠津久伊豆神社（康治元年・1142）が挙げられます。

（3）室町時代

後醍醐天皇による鎌倉幕府討幕の動きのなかで、元弘３年（1333）５月新田義貞と弟の脇屋義助が上野国新田荘で挙兵します。軍勢を進めるうちに新田軍は数を増しつづけ、鎌倉に攻め込んだ時には 20 万騎を超える大軍であったと伝えられます。

この時の戦に係るエピソードが上野田の大徳寺に伝えられています。「大徳寺縁起」によれば、同寺は、鎌倉街道中道沿いに位置し、奥州路の要衝にあたることから、新田義貞らは、通行のたびに大徳寺に参籠し、戦勝を祈願していたといいます。

大日如来の胎内から発見された仏手

北条氏討伐の折も、鎌倉街道中道を進んだ脇屋義助は、勝利を収めたのち帰陣に際し大徳寺を本陣として人馬の休息を取りました。ところが、脇屋軍の出立後に鎌倉勢の残党が寺に入り、酒食ののち寺に火を掛けたため、当時の壮大な伽藍は灰燼に帰したといいます。しかし、本尊の大日如来の御頭と御手は近くの大日沼に隠し置き、のちにこれを引き上げ、尊像を修理して仮堂に安置したと伝えています。

昭和 56 年（1981）に大徳寺の大日如来の修理を行った際、胎内から智拳印を結ぶ両手が発見され、言い伝えが本当であったことがわかりました。

鬼窪八幡宮鰐口（白岡八幡宮・市指定）

室町時代の鬼窪氏の動向に目を転じてみましょう。

観応２年（1351）から翌３年にかけて足利尊氏と弟の直義が争った観応の擾乱が勃発し、武蔵武士たちも両軍に分かれて争っていますが、この中で高麗経澄という人物を含む尊氏方の一軍が、観応２年 12 月に「鬼窪」で旗挙げしたことのわかる文書が残されています（高麗経澄軍忠状「町田家文書」：埼玉県指定）。また、観応３年２月に、高麗経澄が新田勢と戦った際の軍忠状の中に、鬼窪弾正左衛門や鬼窪左近将監という人物と行動をともにしていたことがわかる記述があります。尊氏方の軍勢が集結し旗揚げした場所は、白岡八幡宮と隣接する入耕地館跡（入耕地遺跡に含まれます）だと推定されます。

観応の擾乱から約 20 年後の応安３年（1370）、鎌倉滞在中の五山の名僧義堂周信の日記『空華日用工夫略集』の８月の記述の中に、鬼窪修理亮が出家遁世を願い出たことが記されています。このときのことを少し詳しく見てみましょう。

3 日　鬼窪修理亮来る。告切して改服せんことを欲す、蓋し以って不賞也、再三勧勉してこれを慰む、祥雲庵に送帰して一宿す。
4 日　鬼窪子息小童来る、父海上居士を尋ねる、父子のため点心を排弁す、上杉兵部（能憲）来る、霜台（上杉朝房）上表、鬼窪遁世のことを謝す。
5 日　斉罷入府と幼君（足利氏満）見ゆ、霜台上表、鬼窪遁世のことを略敍す。
7 日　上杉兵部単騎にて来る、書閣に延びて茶話す、天下大事并霜台上京事に及ぶ（中略）しかるに鬼窪に出家不可を面論す、すなわち本に復す、一族皆来賀す。
応安 4 年 5 月
1 日　鬼窪常暁禅人（修理亮か）来る、世間の禍福を論じて云く。

鬼窪修理亮は、義堂周信を師として出家遁世したいと申し出ますが、周信はこれを慰留し、祥雲庵に送って一泊させています。翌日修理亮の息子が訪ねてきたので、周信は親子を点心で饗応しています。また、上杉能憲は、修理亮の出家遁世について、上杉朝房が鎌倉公方に報告したことを伝えるとともに、周信にも謝して受け入れることを求めています。翌 5 日の午後、周信は、鎌倉公方に目通りし、朝房の申し入れを受けて修理亮の出家について報告しています。ところが、7 日「天下の大事」が起こり、朝房が上京することとなったため、修理亮の出家は不可とされます。一族は皆喜び周信のもとへあいさつに来たとの様子が記されています。

応安 4 年 5 月、その後出家を果たしたと思われる修理亮は常暁禅人と名乗り、周信を訪ね、世間の禍福を論じている様子を見ることができます。

上杉能憲と上杉朝房はともに関東管領に任じられている鎌倉府の中核です。義堂周信は、鎌倉公方の養育係で、鎌倉府の政治的ブレーンであった人物です。鬼窪修理亮は、その進退を関東管領が直々に鎌倉公方に伺いを立てるような位置にあったことがわかります。現に天下の大事（信濃善光寺の栗田氏蜂起）が勃発すると一度は認められた出家が取り消されてしまいます。「子息小童」と表現されるような子供のいる年齢とすれば、高齢とは思えません。出家後、周信と世間の禍福を論じているところを見ると、高い教養を持った人物であると推測されます。

これら 14 世紀後半の記録の後、鬼窪氏の足跡は途絶えてしまいます。次に鬼窪氏の名前が現れるのは、15 世紀の半ばの金石資料で、白岡八幡宮に伝えられる享徳 5 年（康正 2 年・1456）銘の鰐口に「武州寄西郡鬼窪八幡宮鰐口」の刻銘があるほか、日高市聖天院に伝えられる応仁 2 年（1468）銘の鰐口（埼玉県指定）には、「武州埼西郡鬼窪郷佐那賀谷（実ケ谷）村」の刻銘が残されており、地名として「鬼窪」の名前が見られます。

さらに 1 世紀ののち、元亀 2 年（1571）小久喜の寿楽院が開かれます。この時開基となるのが、鬼窪尾張繁政という人物です。繁政は、寿楽院に隣接して自らの館を築いていますが、発掘調査の結果 16 世紀半ばを遡る遺物は見られず遺構の重複もないことから、16 世紀半ばに新規に築かれた館とみられます。入耕地館跡が 15 世紀半ばまでには廃絶していることを考えると、約 1 世紀のブランクが生じることとなり、この間の鬼窪氏の足跡は途絶えてしまいます。

（4） 中世起源の寺社・城館跡

中世の白岡の歴史や文化財を見ていく上で欠かすことのできない、中世起源の寺社や城館跡について確認しておきます。

市内の中世起源の寺社は、大徳寺を含む鎌倉街道中道沿線と篠津久伊豆神社から白岡八幡宮にかけての白岡支台の西縁部に集中する傾向があります。

鎌倉街道中道沿線では、胎内に応仁２年（1468）の修理銘のある薬師如来が安置されている太田新井の安楽寺、前述の元弘の乱に係る伝承を持つ上野田の大徳寺、開基を岩付（槻）城主太田（北条）氏房（うじふさ）と伝える正伝寺、渋江兼重（しぶえかねしげ）の開基で、岩付（槻）太田氏の庇護を受けたことを伝える高岩の忠恩寺などがあります。

篠津・白岡地区には、康治元年（1142）の創建と伝える篠津久伊豆神社、文亀 2 年（1502）季雲永岳（きうんえいがく）中興開山、菖蒲城主佐々木氏綱（うじつな）中興開基と伝える興善寺、天文 17 年（1548）の北条綱繁（つなしげ）寄進状があったという白岡八幡宮別当寺正福院、頼朝の命により鬼窪某が社殿を造営したと伝える白岡八幡宮などが並びます。

前者は、慈恩寺支台を縦貫する鎌倉街道中道を軸とした交通に関わる寺社群、後者は白岡支台に拠点を構えた鬼窪氏にかかわる寺社群と括ることができるでしょう。

中世以前の創建と伝える寺社

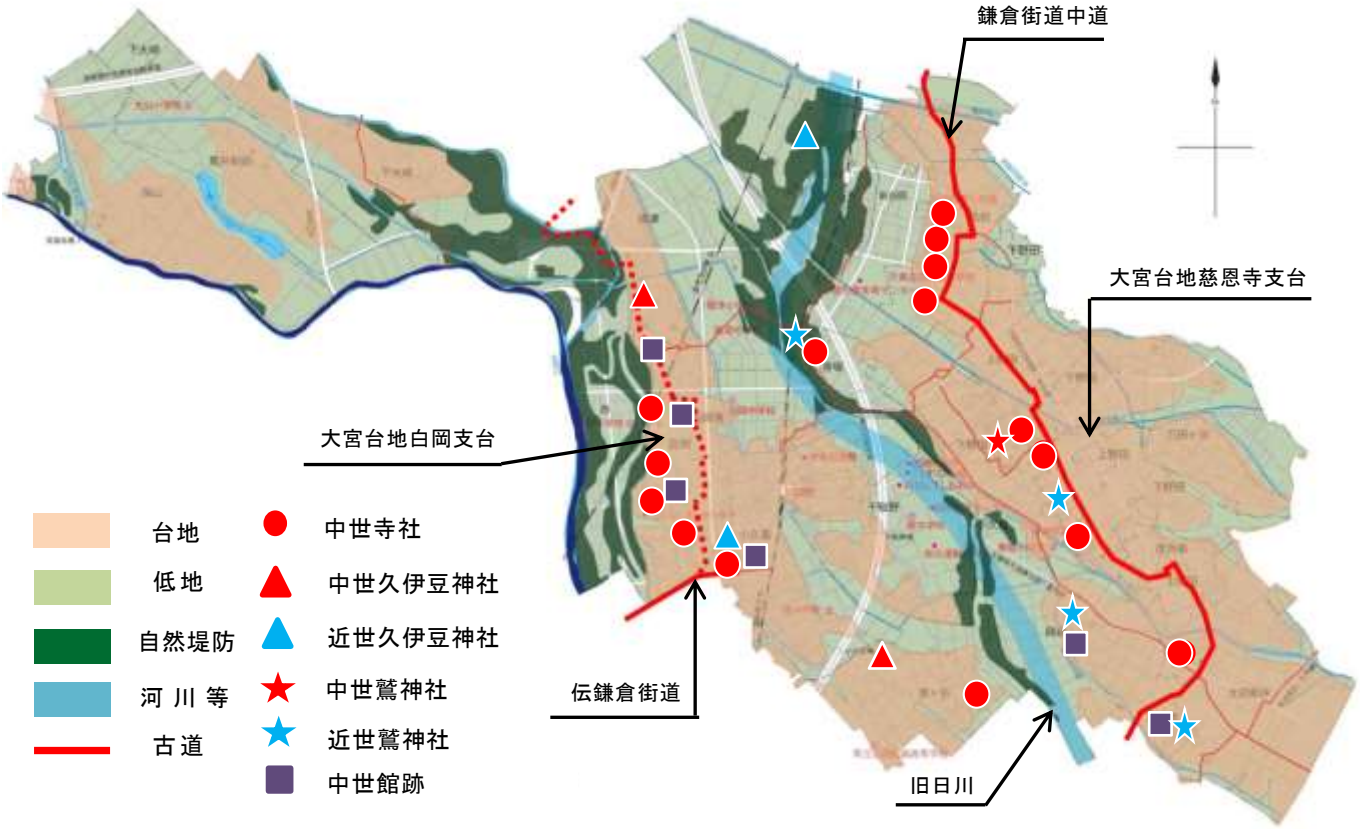
字名	寺社名	創建年代	摘要
実ケ谷	久伊豆神社	嘉吉元年(1441)	県指定聖天院鰐口(応仁２年･1468)が奉納された神社。
	東光院	天文年間(1532～54)	当山派修験、剣１振　当代は神職。
小久喜	寿楽院	元亀２年(1571)	鬼窪尾張繁政開基。
上野田	鷲神社 (高祖明神社)		天文 23 年(1554)銘の鰐口があったと伝えられる(『新編武蔵風土記稿』)。
	大徳寺	永正９年(1512)再建	元弘の乱に係る伝承を持つことから、これ以前からあった寺と思われる。
	大光院(廃寺)	天文２年(1533)	当山派修験。
	正伝寺		開基岩付(槻)城主太田(北条)氏房。
太田新井	安楽寺		薬師如来の体内に応仁２年(1468)の修理銘がある。
篠津	久伊豆神社	康治元年(1142)	『新編武蔵風土記稿』、『武蔵国郡村誌』では確認できず。
高岩	天満神社	応永 32 年(1425)	泉蔵院住職寂元によりもたらされた菅公の画像を祀り氏神とする(『社寺堂庵明細帳』)。
	泉蔵院(廃寺)		住職寂元、応永 31 年(1424)菅公の画像を入手天満神社に祀る。
	勢光寺(廃寺)		開山円竜、天文 21 年(1552)入寂と伝える。
	忠恩寺	天喜２年(1054)	開基渋江兼重、岩付(槻)太田氏の庇護を受ける。
寺塚	東照寺(廃寺)		開山周東は延徳元年(1489)入寂。
白岡	八幡宮	建久６年(1195)	頼朝の命により鬼窪某社殿造営、鬼窪八幡宮鰐口(享徳5･康正 2･1456)あり。
	正福院	嘉祥２年(849)	慈覚大師円仁草創という。天文 17 年(1548)北条綱繁からの寄進状があったという。白岡八幡宮別当寺。
	興善寺	嘉祥２年(849)	慈覚大師円仁草創という。文亀 2 年(1502)季雲永岳曹洞宗に改修。中興開基菖蒲城主佐々木氏綱。

中世城館跡

字名	城館跡（遺跡）名	年代	摘要
岡泉	丸山遺跡	中世	「丸山城」の伝承あり。関連遺構の確認例なし。
太田新井	太田神社遺跡	中世	「太田陣屋」の伝承あり。堀跡確認。
小久喜	南鬼窪氏館跡	16 世紀	鬼窪尾張繁政館跡。堀跡、建物跡等確認。
篠津	中妻遺跡	14～15 世紀	堀跡、建物跡等確認。
白岡	神山遺跡	15～16 世紀	堀跡確認。
	入耕地館跡（入耕地遺跡）	14～15 世紀	堀跡、建物跡等確認。白岡八幡宮、正福院を取り込む規模である可能性あり。

大宮台地の白岡支台と慈恩寺支台を隔てていたのが「日川（にっかわ）」です。日川は、古代末期から中世期には非常に重要な役割を果たした河川で、古代埼玉（さきたま）郡を東西に区分する境界線であったことがわかっています。この領域分けが中世以降の、埼西（さい）領*（日川以西）、と太田荘（おおたのしょう）（日川以東）となって行きます。このため、日川を挟んで、祀られる神社も異なることがわかります。

中世起源の寺社・城館跡等



＊埼西領：中世では「埼西」「寄西」「私市」などの表記が見られるが、近世になると「騎西」と表記されることが多い。

―近世概観―

天正 18 年（1590）7 月、豊臣秀吉の小田原攻撃によって北条氏の関東支配は終わりを告げ、徳川家康の関東入国により近世の幕が開きます。

同年 8 月には、家康による領地割が行われます。この時期、市域は 15 の村によって構成されていましたが、これにより岩槻藩領（岡泉・実ケ谷・千駄野・小久喜・野田・爪田ケ谷・太田新井・高岩・寺塚の 9 か村）・騎西藩領（篠津・野牛の 2 か村）・柴田（しばた）氏領（白岡・柴山・荒井新田・大崎の 4 か村）という 3 つの領地に分かれました。

このうち、柴田氏知行分については、寛永 10 年（1633）に白岡村は旗本川副（かわぞえ）氏、柴山村は旗本南条（なんじょう）氏と同天野（あまの）氏、荒井新田村と大崎村は旗本南条氏の領地となっていることがわかります。

同時期に家康は、寺社に対して一斉に朱印状を与えて朱印地の寄進を行いました。市域では、白岡の一部が興善寺領に、高岩の一部が忠恩寺領になり、それは明治維新まで続きました。

明治維新まで岩槻藩領であった村は岡泉村・千駄野の 2 か村のみで、その他の村々は、天領・御三卿領、そして旗本の知行地へと変遷します。これらの旗本家の中には在地性の強い領主もおり、神社に寄進された石灯籠や寺の縁起書などの中に、領主であった旗本の名が残されています。

朱印状（興善寺・市指定）

江戸時代

1590　徳川家康が江戸に入る

1591　興善寺に 15 石が寄進される

1603　江戸幕府開府

1649　忠恩寺に 30 石が寄進される

1672　白岡村領主の旗本川副重頼が白岡八幡宮に石灯籠を寄進

川副氏寄進の石灯籠

1707　富士山大噴火

1709　野牛村の一部が旗本新井（白石）氏の領地となる

1711　新井白石「筑後守」に任ぜられる
野牛久伊豆神社の額が、朝鮮使節の東郭によって書かれる

1731　見沼代用水の舟運が始まる

1762　彦兵衛新田開発の入札が行われる

1783　浅間山大噴火　**砂降りにより小久喜村の稲が不作**　天明の飢饉

1821　見沼代用水柴山伏越の樋管伏替

1828　小久喜村の鬼久保与右衛門が獅子連中例記を久伊豆神社に奉納する

1842　小久喜村の組頭貞右衛門が鷹場の餌差札と鑑札を受ける

1852　大野雅山が篠津村に漢学塾を開く

1853　ペリーが浦賀に来航する

1854　神奈川で日米和親条約締結

1855　大地震で野牛村の観福寺の宝篋印塔が倒壊する

1858　日米修好通商条約締結

立川音芳らによって篠津久伊豆神社本殿の彫刻が刻まれる

篠津久伊豆神社社殿彫刻

1860　大老井伊直弼暗殺される（桜田門外の変）

1864　この頃　篠津村の山車が造られる

1866　長州藩と薩摩藩が同盟を結ぶ

1867　大政奉還

(1) 近　世

① 新井白石と野牛

新井白石は、明暦３年（1657）上総国久留里藩（現千葉県君津市）の藩士新井正済の子として生まれました。江戸で木下順庵に学んだのち、順庵の推挙で甲府藩主徳川綱豊（のちの徳川家宣）の侍講となります。徳川家宣が六代将軍になると幕臣となり、「急務三条」の進言や幕府財政の打開策、長崎貿易、朝鮮使節の待遇について進言するなどして頭角を現します。宝永６年（1709）には、野牛村など３か村で500石を拝領しました。正徳元年（1711）には朝鮮通信使の接待役を命じられ叙爵（従五位下筑後守）します。通信使接待の功績で500石の加増があり、このときに野牛村一村を500石で知行します。このときの喜びは自伝である『折たく柴の記』に記されています。

新井白石の肖像
（紙本着色新井白石画像・市指定・部分）

野牛には、新井白石ゆかりの文化財として、白石公の肖像画、久伊豆神社扁額、直筆の漢詩、郷倉跡、白石様堀などが大切に受け継がれています。後年村人は、白石公の業績を讃え報恩会を組織し、毎年命日の５月19日に、白石公の肖像画を掲げて供養を行いました。野牛では、親しみを込めて「筑後様まつり」と呼びます。

② 見沼代用水と柴山伏越

江戸時代中期、逼迫する幕府財政の建て直しのため、関東各地の後背湿地や湖沼で干拓事業が盛んに行われます。見沼代用水は、現在のさいたま市と川口市にまたがって存在した見沼溜井を干拓するに当たって代替の灌漑用水として作られたものです。徳川吉宗の命を受けた井澤弥惣兵衛為永が、利根川の水を下中条（現行田市）から取水し、総延長80ｋｍに及ぶ水路をわずか半年で開削したといいます。

柴山伏越は、見沼代用水が元荒川と交差する地点に設けられた施設で、元荒川の川底を見沼代用水が木製の樋管を用いたサイフォン方式で越すものです。長さは、26間（約47m）、内幅１丈４尺（約4.2m）、高さ４尺（約1.2m）を測り、地表から３間（約5.4m）下に埋設されていました。

樋管の伏替は、10年から20年おきに行われ、江戸時代だけで７回の記録が残されています。元荒川を迂回させ川底を掘削する大工事でした。現在のものはコンクリート製で、昭和56年に造られたものです。

柴山伏越（昭和の改修後）

享保13年（1728）に見沼代用水路が開削され、同15年に通船堀ができると、江戸府内との舟運が可能になり、翌年から見沼通船が始まりました。

これにより、年貢米を幕府の蔵がある浅草蔵前

へ運ぶとともに、江戸からの物資を用水路沿岸地域に運び、江戸との経済交流が可能となりました。

運行区間は、当初は江戸から元荒川を掛渡井で渡り、忍城下の須戸橋（現行田市）まで遡っていました。しかし、宝暦 10 年（1760）に掛渡井が廃止され、伏越だけに改造されたため、以後は柴山伏越までの区間での運行となり、柴山の橋戸地区は、舟から荷車への積み換え拠点として栄えることとなりました。

③ 近世期の新田開発と水争い

近世前期には利根川の東遷、荒川の西遷に代表されるいくつもの河川改修事業が行われています。一連の事業は、新田開発と同時に湛水処理の問題を引き起こしており、村々の間で様々な形の争いが起こっています。

例えば、柴山の田口家文書（市指定文化財）の中に「堤土置争論裁許状」があります。

堤土置争論裁許状（田口家文書・市指定）

備前堤の築堤により荒川が現在の元荒川筋を流れるようになると、星川と元荒川に挟まれた小林村、栢間村、新堀村（現久喜市）、柴山村、丸谷村（現久喜市）などは湛水が激しくなり、しばしば洪水に見舞われる地域となってしまいます。この裁許状は、下郷の柴山村、丸谷村が、これまでの堤の上に盛り土を行ったり、新たな堤を築いたりしたため、上郷の小林村、栢間村、新堀村の田が満水時に水浸しになってしまうとして 3 村が訴え、その裁定が下されたものです。

同様の水争いの裁許状は、白岡村と小久喜村・千駄野村との間、白岡村と新宿村（現蓮田市）との間の争論に関しても残されています。当地域の水争いの特徴として、少ない水の分配で争うのではなく、湛水してしまう水をどのように落とすかで争われていることが挙げられます。

また、少し違った内容の裁許絵図が残されています。

入会沼争論絵図は、正徳元年（1711）に、柴山沼の利用をめぐって柴山村・荒井新田村・丸谷村（柴山枝郷）の間で起こった争論に関する絵図です。

柴山沼は、柴山村と荒井新田村の間に位置し、江戸時代、周辺の村々が「藻草銭」という税金を払って、沼で漁撈を行っていました。沼からとれる藻草や海老・雑魚は、田畑の肥やしとして利用されていました。「生類憐れみの令」により貞享 4 年（1687）に漁撈は中断しましたが、宝永 6 年（1709）に再開しています。

争論はこの中断後の入会権を巡るものと思われ、2 年の歳月をかけて決着し、柴山沼は三村の入会地として村ごとに「沼藻草銭」を納めることとなりました。沼の恵みの分配を巡る争論といえましょう。

―近・現代概観―

江戸時代の末、市域には、17 の村々が存在していました。明治 22 年（1889）の「市制・町村制」の公布により、明治の大合併が実施されると、市域では、篠津、野牛、高岩、寺塚、白岡の 5 村が合併して篠津（しのづ）村が、また、柴山、荒井新田、下大崎、上大崎の 4 村が合併して大山（おおやま）村が誕生しました。

さらに、明治 28 年には、岡泉、実ケ谷、千駄野、小久喜、上野田、下野田、爪田ケ谷、太田新井、彦兵衛の 9 村が合併して日勝（ひかち）村が誕生しました。

明治時代後期から昭和前期にかけて、世界恐慌や度重なる戦争の影響から、取り立てて産業のない村々は、徐々に疲弊していきます。

戦後、全国の自治体は合併によって効率化や財政の健全化を図ります。白岡市域でも、日勝・篠津・大山（上大崎は菖蒲町に合併）の 3 村が合併し、白岡町が誕生しました。社会的にも、好景気に支えられていわゆる高度経済成長期に入り社会資本の整備や文化的向上が図られます。

西地区の区画整理に続き、昭和 62 年には、白岡ニュータウンの入居が始まり、町の人口は、急速に増加していきます。

平成 24 年（2012）10 月には、埼玉県で 40 番目の市として単独で市制を施行しました。

白岡町新庁舎落記念式典の様子（昭和 31 年）

明治時代

1871　廃藩置県、埼玉県誕生
1874　見沼通船会社設立
1885　東北線大宮－宇都宮間が開通
1887　柴山伏越、煉瓦造に改築
1889　篠津村、大山村、岡泉村外八か村組合が設置
1894　日清戦争が始まる
1902　加藤喜助家に梨栽培技術伝えられる
1904　日露戦争が始まる
1910　東北線に白岡駅が開業する

大正時代

1918　13 河川改修工事により、隼人堀・元荒川などの改修始まる
1923　関東大震災

昭和時代

1929　白岡乾繭所が竣工
1932　日勝村・大山村「経済更生運動推進」の県指定を受ける
1936　日勝村「愛育村」に指定される
1937　日中戦争が始まる
1941　太平洋戦争が始まる
1945　太平洋戦争が終わる
1954　白岡町誕生
1967　県道大宮・栗橋線開通
1972　東北縦貫自動車道（岩槻－宇都宮間）開通
1979　中央公民館・勤労青少年ホーム開設
白岡駅東口開設
1981　柴山伏越現在の形に改修
1984　白岡町コミセン・児童館開設
1987　新白岡駅開業
1992　白岡町役場新庁舎で業務開始
1999　B&G 財団白岡海洋センター開設
2004　白岡町保健福祉総合センター開設
2011　圏央道白岡菖蒲 IC～久喜白岡 JCT 間開通

平成時代

2012　白岡市誕生
2017　市制施行 5 周年記念式典開催

（1）近　代

①　澁谷塊一の経済更生運動と愛育村

澁谷塊一（かいいち）は明治 26 年（1893）２月に市内岡泉で生まれました。大正３年（1914）に明治大学法科を卒業し、同６年８月には日勝村名誉助役、昭和２年（1927）35 歳の若さで日勝村長に就任し、以来 16 年間にわたり村長として傑出した力量を発揮しました。

主な業績として、疲弊した農村を立て直す「農村経済更生計画樹立村」が挙げられ、昭和 11 年に第１次５か年計画を終え、続いて第２次５か年計画を樹立し大きな成果をあげました。これらの成果により昭和 13 年に全国の模範村として表彰されました。

また、昭和９年に設立された「恩賜財団愛育会」から、昭和 13 年には第１回「愛育村」の指定を受け、全国の愛育事業の先鞭をつけたことも大きな業績です。

指定愛育村とは、当時著しく高かった農山漁村の乳児死亡率の低下を図るために、新しい保健知識を身につけていく活動として、昭和 11 年から愛育会本部が開始した事業です。

昭和 12 年に日勝村は、農村における保健事業の実行にあたり、現在の菁莪（せいが）小学校付近に事務所として「愛育隣保館」を建設しました。建物は洋風２階建て、総坪数は約 86 坪（283.8 ㎡）、総工費 5,000 円でした。職員には、愛育班指導員、嘱託医、産婆、巡回看護婦などが置かれました。事業は、健康相談、生活改善指導、栄養改善指導などを実施し、体力の向上を図り社会の安定と発展を目的としていました。

②　農村経済更生計画と幻のスイカ「埼宝」

昭和７年(1932)の日勝村勢要覧の中にある「西瓜乃栞（すいかのしおり）」によれば、昭和５年(1930)８月８日、日勝村長兼農会長の澁谷塊一が那須御用邸に伺い天皇皇后両陛下に西瓜を献上したことが記されています。

この西瓜は、「埼宝（さいほう）」という品種で「形状ハ小サキ長円形ヲナシ、果皮ハ線状網文ニシテ果肉ハ橙黄色ヲ呈し、風味極メテ淡白上品ナリ」とあります。

献上スイカ「埼宝」

残念ながらこの西瓜は伝えられていませんが、早熟品種で跡地の活用が可能であったため作付けを伸ばし、昭和初期では、梨を上回る収穫量と売上高があったようです。

③　白岡駅の開設と新設白岡車站（しゃたん）*之記

東北線の大宮～宇都宮間は、明治 18 年（1885）７月に開通しました。開通当初、市域の最寄り駅は蓮田駅か久喜駅でした。東北線の複線化情報を受け明治 37 年 12 月、日勝村有志が駅開設の請願書を出しましたが、日露戦争により複線化事業は中断してしまいます。その後の再三の請願の結果、明治 43 年２月 11 日、ついに東北線白岡駅が開業しました。新駅の所在地は小久喜地内でしたが、「小久喜駅」では隣り駅の「久喜駅」と紛らわしく、別の名称を考えるようにという南埼玉郡役所からの指導もあって、現在の「白岡駅」になりました。駅の近くにある、古社白岡八幡宮にちなんだものといわれています。

白岡駅の開設は、当時の日勝村・篠津村両村長をはじめ近隣各村も賛同し、数多くの有志か

＊車站：現代の中国語の chezhan、英語の「station」の訳語で、「駅」「停車場」を意味する。

らの請願や、6,000 坪に及ぶ土地の提供などに支えられて実現しました。新設白岡車站之記の銘文には、このようないきさつが詳細に記されています。また、「この地の民は純朴で農産物が豊富であり、それらの売買・周辺地域の物流のためにも停車場の設置を願っていた」こと、「駅が出来れば白岡八幡宮に参拝に訪れる人々にも便利である」ことを記し、駅開業により利益を求めて入ってくる狡猾（こうかつ）や奢（おご）りの悪風に、土地の純朴さが失われることを心配しています。

④ 梨栽培の歴史

白岡を含む南埼玉郡域における梨栽培は、菖蒲町三箇（現久喜市）出身の五十嵐八五郎によって伝えられたものです。市域に梨栽培が伝わるのは、明治 36 年のことで、荒井新田の加藤家に、また明治 43 年に上野田の小島家に伝えられました。この 2 軒はともに八五郎の実家である菖蒲町柴山枝郷（現久喜市）の木村喜平治家と縁戚にありました。初期の梨栽培は、知人や縁戚関係縁故先に個別に伝えられたものであることがわかります。古くから梨栽培を始めた家は今でも「梨屋（の家）」「大梨屋」などの屋号で呼ばれています。

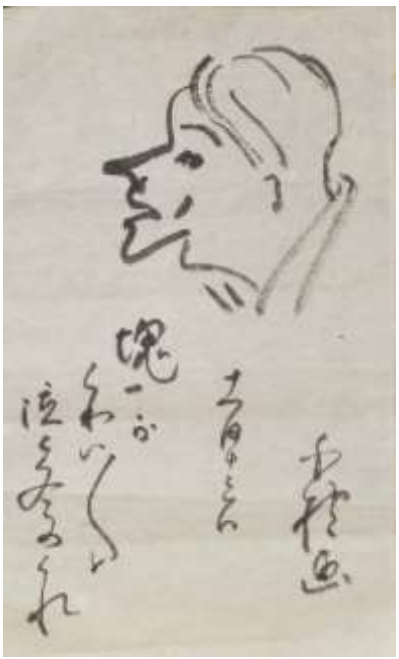
梨栽培が、拡大していく契機となったのは、明治 43 年 8 月の大水害でした。この水害で市域も広範囲で被災し、稲をはじめとする農作物は甚大な被害を被りましたが、梨は、棚掛けしてあったためほとんど被害を受けず収穫できたといいます。このことから急速に作付けを増やしていきます。生産高でも、明治 40 年から大正 10 年までは、5 割から 6 割を児玉郡が占めていましたが、大正 15 年には南埼玉郡が児玉郡を抜きトップに出ます。稲作を支える産業として普及していた養蚕が、昭和初期の世界恐慌によって急速に衰退したことも梨栽培の拡大に拍車をかけました。

栽培技術の面でも、土壌の管理や選定、施肥、病害虫の防除などの改良が進みました。特に、根の活動を促すための深耕と有機質肥料の投入、排水、潅水などが大切とされます。その点、市域の関東ローム層で形成された台地上の梨畑は、程よい水はけを保つことができ、水の管理に手間がかからないことも梨栽培に向いていたということができるでしょう。

⑤ 文化の興隆

前述の澁谷塊一は、北原白秋の門下生として明治大学在学中から「澁谷香井」の名で文芸誌にしばしば投稿していました。日勝村に戻ってからも白秋との関係は保たれ、貧困時代の白秋に食糧を援助するなどしていたことが、塊一と白秋との往復書簡から読み取れます。

澁谷家に「眞珠抄」という折本形式の画文帳が残されています。白秋の詩集『真珠抄』になぞらえたものと思われ、冒頭には白秋直筆の「短唱」と呼ばれる形態の短形詩が 2 編書かれています。その後は、川口市出身の俳人中山稲青や水戸出身の童謡詩人島田忠夫などの画文が続くもので、俳人や画家などが訪れる機会の多くあった澁谷家の様子を村政とは別角度から見ることができます。



白秋の描いた澁谷塊一の似顔絵

彫刻の分野で顕著な足跡を残した人物として、立川金禄を挙げることができます。金禄は、篠津久伊豆神社の社殿彫刻や篠津天王様の山車彫刻を手掛けた一人である立川音吉（芳）の孫に当たる人物です。篠津尋常高等小学校を出ると父初五

郎の下で宮彫師として修行を積みますが、宮彫師だけでは生活が成り立たず、欄間彫刻、仏像・神像の製作修復、慶弔に使う漆器の塗り直しなども請け負っていたといいます。

21 歳のときに帝展（のちの日展）を見に行き立体彫刻の魅力に取り憑かれ、23 歳のときにのちに日展参与となる橋本高昇に弟子入りします。昭和 16 年 33 歳のときに「第 1 回正統木彫家協会展」に「軍鶏（しゃも）」を出品したのが初めての展覧会作品です。

戦後昭和 21 年に開催された「第 1 回日展」に『軍鶏』で入選を果たして以来、22 回の「日展」（「新日展」「改組日展」を含む）入選歴を誇ります。このほかにも、「一水会展」への油絵の出品を行ったり、埼玉県展の審査員を務めたりしています。金禄は、地域の人々にも支えられ多くの作品を残しています。

(2) 現　代

① 白岡町の誕生

昭和 28 年（1953）9 月には、地方自治体の財政基盤の強化と地方行政の簡素化を目的に「町村合併促進法」が制定されました。

町域でも、日勝村・篠津村・大山村の各村がそれぞれに合併促進審議会を設け、慎重な検討が進められたほか、住民に対する合併趣旨の普及が図られ、紆余曲折の末、昭和 29 年 9 月 1 日に白岡町が誕生したのです。

白岡町の誕生は、県内の町村合併において 2 つの特色がありました。1 つは、大山村の一部が菖蒲町に合併するという「県内初の分離合併」です。もう 1 つは、村同士の合併で初の町制施行でした。

白岡町が誕生した 2 年後の昭和 31 年（1956）、新しい白岡町の方向性を示すために作成された『新町建設計画書』では、「白岡町百年の大計を期して相応しいもの」として、白岡町の地理的・経済的な環境を踏まえながら、農業経営の改善、土地改良事業、教育施設、学区問題の解決などを柱とする内容がまとめられています。

② 発展する白岡

高度経済成長期、昭和 38 年（1963）には、サッポロ農産加工が営業を開始、昭和 42 年には、現在の県道さいたま栗橋線が開通します。昭和 44 年には、西地区区画整理事業開始、昭和 47 年には、東北縦貫自動車道が開通します。

住環境の整備に伴う人口増加により、昭和 50 年（1975）の南小学校、昭和 53 年の西小学校に続いて、昭和 57 年には南中学校が開校します。

また、昭和 52 年には県立白岡高等学校が開校しました。

昭和 62 年（1987）には、宇都宮線新白岡駅開業とともに白岡ニュータウンの入居が始まり、新たなまちづくりが始まりました。

平成 4 年（1992）新市庁舎が完成、平成 24 年には市制を施行しました。

東北縦貫自動車道開通

新白岡駅開業